
かがやきながら・・・

佐々木保典

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かがやきながら・・・

【Nコード】

N1175N

【作者名】

佐々木保典

【あらすじ】

私は、偶然知り合った『洋子』と名乗る女性と同棲を始める。洋子との生活の中で、ふくらむままの幸せを夢見ていたある日、洋子が普通の人間とは違うことに気づく。

明日になれば、私はこの街を離れてしまう。

私は明暗の際立ったこの街が好きだった。

都会は嫌いだと誰もが言うけれども、土の匂いなど嗅がせないようにと入りくんで建てられた建造物の影から、人というものの臭いが限りなく濃密に漂ってくるのを感じる度に、かえって郷里というものを感じさせる強さがこの街にはあると思った。故郷を大事だと言える人間にしてくれたのは、この街だった。そう考えれば、都会がふるさとを生産しているのではないか、と思えるほどである。

この街で洋子に出会った。

官公庁が立ち並ぶオフィス街の自走歩道で洋子と初めてすれ違ったとき、彼女はまったくこの街に不釣り合いな、薄いピンクのリボンをつけた白い帽子をかぶっていた。季節は初冬で厚い幔幕のような曇天だったにも関わらず、彼女は真夏の太陽の下を歩くように、目を細めて佇んでいたのだった。

ビル風と思われる突風が奔って、彼女の帽子を空に舞わせた。今にして思えばあの風が私に洋子を運んだのかもしれない。白い帽子は僕の足もとに落ちた。拾い上げて飛んできた方向を見ると、洋子が自走歩道の手すりを乗り越えてこちらに向かっているところだった。

「ありがとう」

と言った声が印象的だったのは、それがちょっと高い男の声に聞こえたからだ。確かに風貌は女のそれで、エキゾチックなアロマもあったのですっかりそうだと思いきんでいたが、もしかすると、女装趣味の男であるのかもしれない、と失礼にも感じてしまったのを覚えている。そういう友人を私は一人知っていて、彼はより女性らしい服装を好んだ。そう考えれば、目の前の女性が、レースの白いワンピースを、季節を外してまで着ている理由を否が応でも考え

てしまった。

「――いや」

私はそんな心情を覆い隠すほど人付き合いがうまくなく、そのせいで開拓ルートの営業を外されたくらいだから、洋子にはすぐに見破られた。

「あら」

「――え」

「そういうお顔はなさらない方がよろしいわ」

その時は、それで会話が終わった。自走歩道の手すりを乗り越えて、また反対側に戻って遠ざかっていく姿をしばらくぼんやりと眺めた。途中、洋子との相対速度が急に衰えたと思ったら、私の自走歩道はそこで終点だった。声をかければよかったかな、と少し後悔した。いや、私は開拓に向いていない。誰も足を踏み入れたことのない場所に行つて、美しく咲く花を摘むほど、私は自分の一歩一歩に覚悟を持てなかったのだ。それが私の実力であるとすんなり受け入れてしまえば、不思議と苦もなく生活はできた。だから、休日に環状線に乗って遠出したときに、洋子の方から声をかけられたのは本当に意外だった。手の届かないと思っていたものが、ある日突然宅配便で送られてきたような奇妙な感覚に、私は大いに戸惑った。

「この前はどうも」

やはり印象に残る声である。ただ、先日と違っていたのは声の高さで、ずっと耳なじむ抜けるような高音だった。一聴して女性とわかる声音だったので、振り返ったとき、声の主が洋子であるとは思われなかった。少し、間が空いていたように思う。取引先のどこかで顔を会わせた人間が、頭の中で随分と飛び交ってから、それが先日官公庁街で帽子をきっかけに会話をした女性だとわかった。私は脳裏にありありとその日の洋子の顔を思い浮かべて、自分の行為に恥ずべきものがあったことを詫びた。

「いいのよ」

と、洋子は高い声で笑った。私は藍色のセーターにジーンズという

いささか凡庸な身なりだったが、洋子は白い革のパンツに光沢の美しい黒いジャケットを羽織り、右手にブランドの名前の入った紙袋をいくつも抱えてたっぷりと香水を漂わせていたが、帽子はかぶっていないかった。

「今日は帽子はないんですね」

大通りに張り出したカフェの白いテラスの上で、洋子は美しくはにかんだ。

「あの帽子は大事な日につけることにしているの。あのワンピースもそう」

「大事な日ってというのは――」

「私が生まれた日」

その時私は洋子の視線が過去を彷徨うのを確かに見たのだが、そうか、あの日が誕生日だったのか、と望外の事実を知った思いで単純に喜び、密かに仕事のスケジュールを確認すると言って、手帳にそのことを書き込んだ。

洋子は私の隣に腰掛けてエスプレッソを注文すると、足を組んで私を見つめた。

自慢ではないが、これでもなかなか多くの女性と付き合ってきた。開拓は苦手だが、フロンティアが歩んだ道を綺麗に舗装するのは得意なようで、誰かに捨てられた女性のフォローをすることが多く、その都度相手にした女と短い間ではあったが必ず一緒にいた。まるで切り株に獲物が躓くのを待っているようで、まあ嫌な気分ではないものの、わずかながら罪悪感もある。

洋子が私に送ってきた視線に、同じような色を感じたので、私は困惑した。つまり、この女もどこの誰だかわからない男に捨てられ、私に身を委ねようとしているのだ。そう思いこんでしまうと、もう私の理性は無意識野の私自身が表層にあふれ出てくるのをとめられなかった。

私はこういうとき、決まって一つ微笑んでからそれに応えることにしている。己の情けなさを吹き飛ばす微笑だ。

「あなたを見ていると季節がわからなくなります」

「私の中ではいつでも夏よ」

「どうして」

「私が生まれた季節」

え、と私は驚いて彼女に尋ねた。

「あなたの誕生日は、この前だったのでは？」

私の質問に答える洋子の瞳に、波が映ったように感じた。私はゆりかごにつつまれるような錯覚を思っ、彼女にしがみつくように答えを待った。

「私が生まれた頃は今の季節が夏だったのよ」

「はは。からかわれてるな」

「いい男よ、あなた」

「よく見てください。天気が悪いのかもしれないな」

「私は洋子、あなたは」

「加賀といいます」

「名前よ」

「達郎」

「――あら」

「どうかしましたか」

洋子は口をすぼめて驚いたような表情を浮かべたが、すぐに微笑に戻った。私は特に訝しんだ覚えはないから、彼女が何かに対して取り澄ましたのだとは気づきもなかったのだった。そう思ったところが、後で考えてみれば開拓に向いていない理由なのだとは思う。細かい仕草や表情には驚くほど精緻な情報がちりばめられている、ということがわかったのは、洋子と出会ってからだった。彼女は素晴らしい観察眼で人を見て、いつもその人間の本質に辿り着こうとした。

「いつもお一人なのね」

洋子の置いたデミタスグラスが乾いた音を立てて鳴った。つるの部分に差し入れられた洋子の手は、淡いともしびを浮かび上がらせ

た白磁のようで、すらりと伸びた爪の先には紫のマニキュアがあまりに豊かに光るので、私は洋子の言葉を深く考えなかった。

「心も——」

「こころ」

わたしは不躰にそう復唱すると、洋子はルージュの端に微笑みをたなびかせて、立ち上がった。

「海が見たいわ。連れて行ってくださる？」

それからいったいどういう経路を辿って海に着いたかは覚えていない。気付いてみると、私は洋子と一緒に場末のモーテルに入っているという始末だった。

夕日が赤光をたぎらせて部屋の中に割り込んでいた。

私はなぜこんな状況になってしまったのか、考えた。それが単なる愚考だとしても、考え続けねばならなかった。私を正当化できるのは、私だけなのだから。

洋子はそんな私をほったらかしにしたまま、窓を開けて宵闇が迫る海を眺めていた。

その形容しがたい美しさが、私の思考を止めてしまった。

窓の先には光の斑紋をいくつも浮かべた海が見える。洋子は差し入ってくる光に輪郭をとろかされて立ちすくんでいるように見えた。オレンジの光の中に分け入っていくようでもあった。

ふと私の中に、調和、という言葉が浮かんた。

そう、洋子はまったく景色と同一物となっっているようで、私は今、人の意志の介在する余地のない驚くべき高次の存在を目の当たりにしているために、思考が追いつかないのではないかと思ったのだった。だから、といっては変かもしれないが、当たり前のように、次の洋子のセリフは私に染み渡ってきた。

「私が昔、男だったとしたら——あなたは、そうね、きっと驚かないのでしょうね」

さっと、何かが腑に落ちたのだった。

目の前の女性は、男に捨てられたのではなく、男そのものを捨て

てきたのだと知って、私は頷くのも忘れてただ呆然と彼女を見るしかなかった。

そんな私の顔に洋子の手が触れた。

瞬く間に彼女の両手が顔全体を包み込んで、唇が重なった。

溺れるような、濡れた唇の輪郭。

私の理性は素直に揺らぎの中に埋もれ、時折姿を見せてはまたその身を隠し、留まることを知らないまま、本能の波にさらわれた。男であるとか。

女であるとか。

そういった些事が惹かれ合う二人の人間のあいだのどこに現れることがあるだろうか。ジェンダーだとかセックスだとかおかまいなしに、人は人とはだを重ねることを望んでいる。遠くない未来に、我々の性別の垣根は薄れていくだろう。

そんな予感がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1175n/>

かがやきながら・・・

2010年10月8日14時43分発行